

## 清と朝鮮の関係における圏域の分離と融合…

朝鮮使節とパンチエン・ラマの邂逅（一七八〇）を事例に

姜 東 局

### 一．はじめに

東アジアの国際関係に関する学問的な考察の初期から、清と朝鮮の関係は、もともと典型的な上国と朝貢国との関係として、すなわち、中国的世界秩序を支える儒教的な世界観に基づいて、字小事大の原理によって規定された関係であると理解されてきた。ところが、清史と朝鮮史に関する研究の進展によって、清と朝鮮の関係に対する以上のような理解は修正を余儀なくされた。第一に、上国としての清のイメージが変化した。従来の理解では、清が漢化したことを前提として、清を典型的な上国とみなしていた。清史の研究の進展から、清は漢族の文化に素早く同化されたわけではなく、満州族の特徴を長く維持していたこと、チベットなどの非漢族の文化の影響も受けていたこと、そして、多文化の状況を前提にして新しい統合の論理を形成していたことなどが明らかに<sup>(1)</sup>なった。また、従来の研究では、漢化された清は文を尊んで平和的な外交を展開した側面が強調されたが、たとえば、中央アジアにおける清は、ロシアなどと競争をしながら支配範囲を広げた「帝国主義」の勢力としての顔<sup>(2)</sup>を持っていったことなど、武を尊んで好戦的な外交を展開した側面も強調されることになった。第二に、朝貢国で

ある朝鮮のイメージも変わった。朝鮮は従順な朝貢国として理解されてきたが、研究の進展によって、この態度は形式的なものにすぎなかったことが明らかになってきた。すなわち、古代から北方の少数民族である満州族を蔑視していた朝鮮では、清の武には敗れたものの、文における自国の優位性は変わらないという信念が広く共有されていたのである。そこで、朝鮮には自国が中華であった明の正統な後継者であるという朝鮮中華—史料の表現では、小中華—の意識が広がっていた。<sup>③</sup>朝鮮は、心から清を上国として認める従順な小国ではなかったのである。

以上のような変化によって、清と朝鮮の関係における安定に対する従来の理解にも全般的な読み直しが必要となってきた。強大かつ好戦的で、実際に膨張していた清と、弱小ではあるがその清を軽蔑する朝鮮が並立していたという国際政治の現実からすると、両国関係の安定は「礼治」の理念の実現の結果であったという単純な説明では十分ではない。平和は、清と朝鮮という典型的な上国と朝貢国間の字小事大の関係によって維持されたという意味で当然の結果ではなく、それを妨げる方向へのアクターの変容という悪条件があったにもかかわらず維持された意外な成果として理解されるべきであろう。すると、これほど長い間、悪条件の中で平和が守られたとすれば、安定の維持に寄与した何らかの仕組みが存在したと想定することが自然であろう。

この仕組みについては、まず権力政治の側面から説明する必要がある。夫馬進の研究によると、中国と朝鮮の間には「礼治」の理念だけでなく、「礼治」の実態として、礼が守られなかった際の制裁を意味する「問罪」も存在した。さらには、その問罪は、明と清が朝鮮に何らかの政治的メッセージを送る必要がある際に行われるという意味で、権力政治の動きに強く影響されていた。<sup>④</sup>確かに、このような権力政治の側面は両国関係を動かした原理として無視できないが、この説明は限定的であることも事実である。夫馬進の研究は、明清と朝鮮の間に「問罪」の問題が浮上していた時期を中心に考察の時期としているため、たとえば、清と朝鮮の間においては、考

察の時期が初期—具体的には呉三桂の乱の終束(一六八一年)まで—toに限定され、その後は安定期に入ったと評価するにとどまっている。<sup>5)</sup> 彼はこの安定期における平和の維持の原因については殆ど触れていないが、おそらく権力政治の安定がもつとも重要な変数として考えられたからだと推測できよう。

ところが、本稿で注目するアクターの変化の問題は、権力政治とは区別される変数である。国際関係論の言葉でいえば、アクターのアイデンティティの変化は、主に権力政治に注目することでアクターの特徴を変数として考慮しないリアリズム (realism) の立場からは把握しにくいものである。ところがコンストラクティビズム (constructivism) の立場からすると、約二〇〇年間に、両国が対立するアイデンティティを維持しながらも、原則的に、一年四回—実際は平均二・六回—の朝貢によって密接な関係を維持していたことは、驚くべき事例として浮上してくる。すると、アイデンティティの衝突が両国関係の安定を損なうことを防止する権力政治以外の何らかの仕組みが存在した可能性も考慮すべきであろう。

本稿は以上のような問題関心から、清朝の世界秩序に存在していた領域的な区分の国際政治的な意味を問い直す。マンコール (M. Mancall) がフェアバンク (J. K. Fairbank) 編の古典的研究の中で、清の国際関係が西北クレセント (northwestern crescent) と東南クレセント (southeastern crescent) にわけられていたと指摘したとおり、清と周辺国の関係は二元的なものではなかった。<sup>6)</sup> その後の一連の研究で、この区分の様々な側面が探求されたが、清の皇帝がこのように区分された空間において、中華世界では儒教的徳治を体現する「中華皇帝」、チベット仏教世界のモンゴル・チベットでは仏教を守護する「文殊(菩薩)の化身」であることを自ら演出することで、両世界での支配の正統性を確立したという岡洋樹の指摘は、これらの研究の一つのまとめといえよう。<sup>7)</sup> ところで、以上のような区分に対する研究は、主に清の時期に中国の一部になった非儒教圏との関係を中心に行われた。ま

た、清史の新しい研究成果を朝鮮史の研究に組み込む動きもほとんど存在しなかった。したがって、清における領域的な区分が清と朝鮮の関係に及ぼした影響についての研究は、ほとんど行われてこなかった。

ところが、清と朝鮮の関係におけるアクターの変化と国際関係の安定という問題を考えると、この区分が両国関係にも重要な役割を演じた可能性が浮かんでくる。まず、清は、この区分があったからこそ、朝鮮には典型的な中華王朝の姿だけを見せることで上国として振る舞うことができたために、清の複雑なアイデンティティは、朝鮮との関係の安定を害しなかったのではないか。また、朝鮮は、内政と外交の区分に基づいて、内部においては、小中華の信念を維持しながら、外部との関係、すなわち朝貢などの礼的な関係においては、恰も朝貢国の役割を演じることができたために、朝鮮というアクターの変化も、両国関係に悪い影響を与えなかったのではないか。要するに、清と朝鮮にあった二つの区分が両国関係に分離の構造を作ること、両国関係はアクターの変化の問題を乗り越えられ、安定を維持することができたという仮説が設定できよう。

この仮説は、あまりにも常識的なものに見えるかもしれないが、これを学問的に証明することはそれほど簡単ではない。この仮説の通りに、分離の仕組みが有効に作用することで、両国の間において何の問題も発生しなかったとすれば、この仕組みは自然なものに見え、かえってとらえづらくなるような状況が発生する。すなわち、分離によって「礼治」の理念の通りに両国の関係が動いたとすれば、仕組みの存在や構造などを客観的に証明することが難しくなるであろう。ところが、もし分離の仕組みが崩れる例外的な事件があったとすれば、その崩壊や修復の過程で、分離の仕組みの様々な側面―分離は如何なる構造を持っていたのか、それは如何なる方法で維持されたのか、崩壊した後の修復は如何なる過程を経たのかなど―が明確になる可能性がある。

本稿は、清と朝鮮の安定期に分離の仕組みの崩壊と修復をもたらした事件として、朝鮮使節とパンチェン・ラ

マ六世 (Dpal-ltan ye-shes<sup>1)</sup> 一七二八—一七八〇) の邂逅に注目する。一七八〇年、乾隆帝の七〇歳の誕生日を祝う一連の行事の際に、皇帝の指示によって朝鮮の朝貢使節とチベット仏教の指導者であるパンチェン・ラマ六世が熱河—現在の承德—の避暑山荘で出会った。<sup>9)</sup> 儒教の観点から乾隆帝を皇帝と理解していた朝貢使節と、乾隆帝を世俗の世界における仏教の保護者とみなしていたパンチェン・ラマとの邂逅は、清の支配下で共存していた多様な文明に基づいた政治勢力の間の予期せぬ衝突であったが、それは清と朝鮮の関係からすると、皇帝自らが、朝鮮に向かって清が純粹な儒教の王朝ではないことを公表することで、両国の間に存在した分離が突如崩壊した事件として理解できよう。すると、分離から融合への変化がもたらした混乱の様子、そしてそれを收拾することと分離を回復する過程を綿密に追跡する作業を通じて、清と朝鮮の安定期に平和をもたらした分離の仕組みに対する構造的な理解が期待できよう。このような作業が本稿の課題である。

ところが、この作業を行うために克服すべきもう一つの問題が史料の面に存在する。一七八〇年の事件のように、分離の仕組みが崩壊したことがあったとしても、それが素早く回復されれば、歴史の記録は回復された分離のもとで書かれるため、そこには歴史の全貌が残らない可能性が高い。後で詳しく述べるように、清と朝鮮の公式記録には、朝鮮使節とパンチェン・ラマとの邂逅が隠ぺいされるなど、実際、分離の仕組みが非常に把握しにくくなっている。しかし、幸いにも一七八〇年の使節団には、十八世紀後期における朝鮮の新しい知的な運動を代表する風変わりな人物が参加していた。燕岩朴趾源(一七三七—一八〇五)は、正使朴明源の親戚として、偶然にも使節団と同行し、天性の好奇心と鋭い観察力から手に入れた様々な情報を『熱河日記』にまとめた。<sup>10)</sup> 彼らは、科擧を拒否することで、文明と権力が統合されたシステムから距離を保つことができ、自由な認識の空間を獲得していた。国際関係における融合と分離という、文明的であると同時に権力的であった変動に対しても、彼の自

由の精神は光彩を放ったのである。<sup>11)</sup>『熱河日記』は、まさに朴趾源の自由な精神的営みの結果として、忘却されるはずの歴史を我々に伝えたのである。そこで、本稿は『熱河日記』を中心とする私的な記録と清と朝鮮の公式的な記録を参照しながら、朝鮮使節とパンチェン・ラマとの邂逅の経過とその記録をめぐる国際・国内の政治的な動向を考察し、また、それに関わる言説を分析する作業を行うことで、清と朝鮮の間に存在した平和の仕組みとしての分離の仕組みに対する構造的な理解を試みる。そして、この作業を通じて、これまでとは異なる清と朝鮮の関係の一面が見えたとすれば、この新しい知見が如何なる意味を持つかについて吟味するつもりである。

## 二・揺れる境界

一七八〇年は、乾隆帝が七〇歳になる年であった。皇帝の誕生日が近づいてくるとともに、天下を構成する国家や地域から多くの祝賀の使節が清へと向かった。その中でもっとも特別な来訪者は、チベットからきたパンチェン・ラマ六世であった。<sup>12)</sup>彼は、一八七九年六月―旧暦。以下も同じ―にチベットを出発して、青海で冬を過ごし、翌年の七月二十一日に熱河の避暑山荘に到着した。次の日に皇帝への礼品を献上し、二十三日には、乾隆帝が須弥山福寿之廟を訪ね、パンチェン・ラマと会ったのである。一方、清からすればチベットとは反対側の朝鮮からは、五月二五日に正使朴明源、副使鄭元始、書状官趙鼎鎮を中心に構成された使臣団が国王の正祖に最後の報告をしたうえで、直ちにソウルを出発した。彼等は梅雨で水が増えたために悪条件になった道に悪戦苦闘したが、八月一日には北京に到着した。そこで礼部に表文と咨文を提出したが、礼部からは乾隆帝が熱河にいるこ

と、そして、北京の官僚は北京からの望賀礼の形式で皇帝の七〇歳の誕生日を祝う聖節陳賀を行うため、朝鮮の使臣もそこに参列することになっているとの知らせがあった。ところが、八月四日に礼部から、朝鮮の使臣も熱河に訪れ、賀礼に参加するようにとの皇帝の勅旨が届いたという急な知らせを受けた。そこで急遽、使節団の中から熱河に向かう七十四名をさらに編成し、八月五日に熱河へ向けて出発したのである。途中で皇帝からの催促もあったため、使節団は徹夜で険しい道をかなり早い速度で移動し、八月九日の午前には乾隆帝とパンチェン・ラマのいる熱河に到着したのである。<sup>(15)</sup>

そして、翌八月十日に、朝鮮の使臣に乾隆帝からの知らせが届いた。

軍機大臣が皇帝の勅旨を奉ってきて、チベットの聖なる僧侶に赴いて会いたいかと聞いた。使臣は「皇上が小国を愛すること（＝字小）は、内地のように見なしてくださいとさることで、中国の人士と交流すること<sup>(14)</sup>は厭いません。ただ、他国の人に至っては、敢えて通うことをしないのが、小国の法であります」と答えた。

乾隆帝のこの命令からすべてが始まった。朝鮮の使臣は、皇帝からパンチェン・ラマと会うように勧められ、拒否の意思を表明したのである。天子の命令への抵抗とも見えるこの大胆な行動は、清と朝鮮が共有していると考えられていた国際関係の規範が持つ力への信念に基づいていた。使臣は、「字小」の議論をしているが、それは清と朝鮮の関係が字小事大に基づいているというコンセンサスの確認であった。そして、使臣はこの原理の適用範囲を、清と朝鮮の関係に限定した。清と朝鮮が原理を共有する圏域とそれと異なる圏域を区別したうえで、字小事大の関係は前者の圏域に限定されるため、後者との関係設定については朝鮮の意思で行うという説明がなされていたのである。<sup>(15)</sup>そして、朝鮮の意思は、小国の法に基づいた分離の維持として提示された。

その後、使節団の中で、如何にこの事態に対応すべきかをめぐって議論が飛び交った。たとえば以下のような意見が出された。

軍機大臣が去った後、使臣は皆顔に愁容を表した。通訳が慌てて奔走し、宿醉が続いたようであった。裨将（遣外使臣の遂行武官・筆者注）たちは、公然と怒りを発し「皇帝のやることはあやしく、悪い。必ず亡びる。必ず亡びる。夷狄のやることだ。大明の時代には、このようなことがなかったらう」といった。首席通訳は、大変忙しい中でも、裨将に向かって、「春秋の大義が出てくる場合ではない」といった。<sup>6)</sup>

裨将は、朱子学の主な敵である仏教の僧侶と会うことを勧める皇帝への反感を露わにした。これは純粹な朱子学者の典型的な反応といえよう。さらに、「大明」との比較から、乾隆帝の暴挙を議論している点に、明の継承者を自負する小中華意識の特徴も明確に見られる。一方、通訳の対応は裨将とは異なっていた。彼等は、当時には珍しく両国の言語が理解でき、両国に関わる境界人であり、また両班ではない中人で、必ずしも朱子学への信念が強くなかったために、使節団の中ではもっとも現実政治への配慮に傾斜しがちな存在であった。通訳の言葉は、清の皇帝という権力者の命令の形をとって迫りくる権力を目の前にして、「春秋の大義」などの理念は政治的判断の場から排除すべきであるという主張であった。その両極端の姿勢は、朝鮮において決して新しいものではなかった。前者は小中華の議論として朝鮮の内部で主流であり、後者は清との国際関係の現場で主流であったのである。そして、この両者は、各々異なる空間を占有しながら共存していた。裨将と通訳の論理は、この両方を各々代表していた。熱河において変化したのは、皇帝の命令によってこの二つの意見の対立を防いでいた国内と国際政治の境界の分離が崩れ始めたという政治的な状況であった。

彼らの議論が結論を出せないうちに、乾隆帝から新しい勅旨が届いた。「突然、軍機大臣が飛ぶように馬で駆



けてきて、皇帝の勅旨を口頭で宣布して「中国と朝鮮の人々は一体なので、赴いて会うべきである」といったのである。<sup>(1)</sup> 乾隆帝は、「中国と朝鮮の人々は一体（＝中朝人一体）」であるという前提に立っている。「中朝人一体」は、雍正帝以来の「中外一体」を朝鮮という相手に合わせて表現したものと思われる。「中外一体」はチベットのような藩部を相手に主に使われ、朝貢国や通行の持たない国に対しては殆ど用いなかったことから、この表現を使ったことだけでも大きな変化であった。上記の文章を清の「中外一体」の意味から理解すると、おそらく儒教や仏教という「教」とは関係なく、皇帝の権力に従うことを促す意味が強い融合の言葉であったと思われる。<sup>(2)</sup> その結果はもちろん、分離の崩壊である。ところが、「中外一体」の発想は、朝鮮にはそれほど馴染みがなかった。その結果、朝鮮の使節は清の内的なコンテキストからこの言葉を理解することができなかった。この言葉は彼らに、多文化の清と儒教文明の朝鮮が一体なので、朝鮮も清と同じくチベット仏教に接すべきであるという言語道断の命令に聞こえてくる。以上のように、権力と文明をめぐる意思疎通の混乱はあったが、双方ともに皇帝の言葉が、朝鮮を儒教的な圏域の中の存在にさせていた分離が崩壊したことの宣言であったという意味は共有できた。

以上のような経緯で、朝鮮の使節団は、パンチェン・ラマとの邂逅をめぐる乾隆帝の意思と論理を彼らなりに理解した。道徳と権力、および心情と結果が混在する緊迫した状況の中で政治的決断は、使節の任務であった。使節団の三人の中でも、代表である正使の朴明源が究極的な責任を負うことになるが、彼は非常に責任感の強い人物であったらしい。朴明源を中心とする使臣団の議論では、「赴いて会えば、最終的には苦しい立場になる」という意見や「礼部に文書を送って、道理に基づいて争うべきだ」という意見などが飛び交った。<sup>(3)</sup> 権力政治の現実に対する憂いとともに、道徳的原理の立場から乾隆帝に抵抗しようとする意見もあったのである。その際に、

清の礼部で行った情報収集からは、乾隆帝が「その国は礼を知っているが、陪臣は礼を知らない」といったことがわかった<sup>24)</sup>。乾隆帝は、礼の言説を持って、朝鮮の使臣の抵抗に対して不快感を表したのである。皇帝が朝鮮という国家―あるいは国王―と使臣を対比していることから、これまでの朝鮮が行ってきた字小事大の礼の延長上で、パンチェン・ラマとの邂逅という分離の撤廃を正当化している点は理解できよう。

その後使臣間の議論がどのように展開したかは詳らかではないが、次節で紹介する通り、翌朝の清朝の官僚との対話が、パンチェン・ラマと会うことを前提になされていたことから、権力と論理を備えた乾隆帝の命令に従う方向へと議論が進んだことは確かであろう。以上のように、乾隆帝による権力と論理の両面からの圧力で、朝鮮の使臣も耐えきれなくなった結果、清と朝鮮の間に存在していた分離の壁はもろくも崩壊したのである。朝鮮の使臣はとうとう異端の指導者であるパンチェン・ラマと会うことになった。

### 三．分離の崩壊の光景

#### (一) 二つの圏域の衝突、その一・叩頭の礼

十日の夜には礼部から、明日の朝食後か明後日には乾隆帝に会うことになるため、使臣は必ず宮殿にくるようにという知らせが届いた。十一日の朝、使臣は宮殿に向かい、礼部尚書徳保の案内を受けて待機していた。その際に、礼部からはパンチェン・ラマに叩頭するようにとの命令があった。これに対して朝鮮の使臣は、「叩頭の礼は、

天子の前で行うものである。今なぜチベットの僧侶に天子を敬う礼を施すのか」と反論した。<sup>23)</sup>

様々な点において相違がある二つの文明の境界線が一時的になくなるうとしていることで、二つの圏域の間の衝突する諸々の面において問題が発生することとなる。上記のような叩頭をめぐる問題の登場は、分離の撤廃による融合の空間が登場することで、礼の分野にも混乱が起こり始めたことの表れであった。したがって、前日の論争と比べ、論争の構造に明確な類似性が見られるのは不思議なことではない。使臣は叩頭を字小事大の關係に限定される礼とみなした。分離の論理である。これに対して礼部は、「皇帝も先生への礼で彼と会う。使臣は皇帝の命令を奉ずるので、礼はこのように（叩頭…筆者注）すべきである」と再反論したのである。<sup>24)</sup> 礼部の議論は、皇帝との關係性を媒介として用いることで、字小事大の礼を他の圏域まで広げる論理になっていた。まさに、叩頭を対象に、前日の乾隆帝と使臣の対立の論理が適用されたものと理解できよう。チベット仏教を信奉しているモンゴル旗人にもパンチェン・ラマへの叩頭を公にはしないように注意していた清朝廷のこのような姿勢は、朝鮮からすると当然理解しがたいものであった。<sup>25)</sup> そして、使臣が礼部の議論を最後まで受け入れなかった結果、尚書の徳保が、帽子を投げ、叫ぶまでに至ったという。そして、この論争は結論を見ないまま、使臣は、まず乾隆帝へ朝貢の礼を行った。

『承政院日記』の一七八〇年九月十七日の記事には、正使朴明源、副使鄭元始の連名で送った状啓（王の命令で外国や地方に派遣された臣下が、重要な案件に関して王に報告する際の文書…筆者注）が記載されている。そこに見られるこの日の記録は、以下の通りである。

十一日の暁に、提督が「今日は皇帝が必ず引見する」といったので、宮殿に参って待ちました。また、三器の朝食を賜いました。卯時（五時から七時の間…筆者注）に皇帝が宮殿の門からおおいでになって、礼部の

清人の尙書である徳保が三人の使臣および三人の通訳官を連れて、御座の前にいって跪坐をしました。皇帝が「国王は平安であるか」とお聞きになりましたので、臣は「平安です」と謹んでお答えしました。また、「この中で満州語ができる者はいるか」とお聞きになりましたが、通訳がその意味を把握できなかったため、躊躇する際に、清学尹甲宗が答えて「少しはわかります」といいました。皇帝は微笑んで、退出するように命令しました。臣等は、皇帝が未だ戻っていませんでしたので、列に立っていました。皇帝が、軍機章京を使って「貴方らの国家もまた仏を敬うのか。寺院はどのくらいあるのか。また関帝廟はあるのか」とお尋ねになりました。臣等が答えて「国家の習俗では、もともと仏は敬いません。また、寺院はソウルの外にあります。関帝廟は城外に二カ所あります」と申し上げました。皇帝が宮殿内にお戻りになった後、臣等も宿舎へ帰ってきました。また、生荔枝酒一瓶を賜りました。<sup>5)</sup>

乾隆帝からの質問にやたらと仏教に関するものが多かったという点を除けば、分離の空間の儀式としての特性が明確であった皇帝への挨拶は難なく終わったのである。ところが、その後、朝鮮の使臣が須弥山福寿之廟でパンチェン・ラマと会う儀式に参加することで、様々な問題が勃発したのである。

使臣がパンチェン・ラマと会う直前に、今回は軍機大臣から、皇帝もパンチェン・ラマには叩頭するため、使臣も叩頭すべきであるという指示があった。<sup>6)</sup> その日の朝にあつた礼部との争いの種が再び登場したのであつた。この指示をめぐる議論がまたしても曖昧なまま、使臣とパンチェン・ラマの邂逅の時がきた。使臣はパンチェン・ラマと、まずカタール（哈達。中国の文献では恰達）を用いた儀式を行うことになっていた。カタールとは白絹のスカーフのことで、チベットでは高位の人に会う際、このスカーフを渡す挨拶をするのが重要な儀式である。使臣は軍機大臣からカタールを受け取り、首を立てたままパンチェン・ラマにそれを渡した。儀式を終えた使臣は叩頭

の礼をせず、そのまま自分の席へ戻ろうとした。軍機大臣は使臣を戻らせないようにしたが、結局、制止することができなかつたために、使臣は叩頭せずに終わったのである。

この行動は朴明源が自分の信念を貫いたものに見えるかもしれないが、この行動に関する彼の説明はより複雑なものであった。パンチェン・ラマとの邂逅の後、朴明源は以下のようにいったのである。

吾輩がチベットの僧侶に会った際に、礼が異なり、疎かにかつ傲慢であった。礼部の指導とは違つたのである。彼は皇帝の師匠であるので、何か得失が生じるであらう。<sup>14)</sup>

朴明源は、圏域による礼の差異から生まれた非礼について、そして皇帝や礼部との関連から、この傲慢さがもたらすかもしれない国際政治的な結果について懼れていた。彼の非礼に対する後悔の中に、邂逅の直前まで意識的に拒否していた叩頭をなすべきであったという意味が入っているかはさだかではないが、すくなくとも、意図しない非礼についての後悔は明白である。他の圏域への礼の融合は信念から受け入れがたいことであり、またその礼を行おうとしても、こなすことは困難であった。そして、この非礼という失敗は、邂逅が終わり、分離の壁が再び登場した際に、清と朝鮮の両方にそれぞれ異なる形で解決すべき課題を残したのである。この課題の存在やそれに対する処理については第四章で探求することにして、次の節では、突然の邂逅がもたらしたもう一つの混乱を描いてみよう。

## （二）二つの圏域の衝突、その二…仏像の行方

儀式の後に、パンチェン・ラマの命令を受けたチベット仏教の僧侶数十人は、儀式に参加したモンゴル王など

各国の代表に毛織の絨毯やチベットのお香などのものと共に金属製の小さい童仏を配った。朝鮮の使臣に対して、朝貢使節を構成する重要な三つの職、すなわち正使、副使、書状官の各々に一軀の銅仏を含めたものが贈られた。朴趾源は、当時の様子を以下の通りに描いている。

そのときはあわただしく、断るか受けるかの可否を判断する暇もなかった。皇帝の勅旨に関わるもので、彼らも動きが素早く、あつという間に処理した。わが使臣の行動は、ただ彼等の導く通りであつて、土や木の人形のようなものにすぎなかった。そして、通訳は重訳であり、こちらとあちらの通訳が反つて聾者になつたので、広野に行つて突然鬼神にでも会つたかのように、どんなことか推測ができなかつた。使臣には的確な言い分があつたとしても、煩わしくいうことはなく、相手にもまた詳らかにできないところがあつたので、形勢はそのような状況であつた。<sup>28)</sup>

朴趾源によると、儒学の信奉者である使臣が異端のものである銅仏を受け取ることになつた原因は二つあつた。第一に、使臣は銅仏を含めた贈り物を配る儀式の進行にまどわされた。その場には皇帝とともに朝鮮以外にも多くの使節団がいたこともあつて、儀式の進行に圧倒されたことは理解できよう。第二に、贈り物について何かしらの言い分があつたとしても、通訳の問題でうまく伝わらないという問題もあつた。朝鮮の使臣とパンチェン・ラマとの会話は、チベット語―モンゴル語―満州語―中国語―ハンゲル語の五重訳だつたため、朴趾源の指摘のとおり、効率の良い意思疎通はそもそも無理な状況であつた。したがつて、使臣が贈り物について何かいおうとしたとしても、それをいうことができないう状況であつた。

以上のようなことが原因となり、朝鮮の使臣たちも銅仏などを受け取つたが、正使は儀式の後に、「彼らからもらったものは、捨てることと不恭になり、受けても名分がない。どうすればいいのか」と悩んだのである。<sup>29)</sup> 観察者

である朴趾源は、「わが国では、一度仏と関われば必ず終生の弊害になる。しかも、それを与えたのはチベットの僧侶である」と書いた。<sup>(81)</sup>この文章は、使臣のいった「名分」が持つ国内政治的な意味に対する冷静な説明にも見える。このような評価からわかるように、この事件には、儒教の圏域からすれば異端である仏教との交渉が持つ問題性が潜んでいたのである。

『熱河日記』によると、使臣が北京に戻った後に、すべての贈り物を通訳官などに譲渡したが、彼等もこれを汚らわしいものと見なして、銀九〇両で売ろうとしたのである。<sup>(82)</sup>この方法で受け取った仏像をすべて処理し、またさらに受け取ることがなければ、仏像の件は些末なエピソードで終わる可能性もあったが、歴史はそうは動かなかった。圏域の融合と分離の過程で現れた、仏像めぐる熾烈な闘争の政治史に関しては次の章で考察する。

#### 四・分離の再確立へ

##### (一) 清における分離への復帰

朝鮮使臣とパンチエン・ラマとの邂逅が終わるとともに、この邂逅によってもたらされた分離の崩壊も急速に回復に向かった。その結果、分離の崩壊がもたらした混沌も収まりをみせた。同時に融合の際の事件に関する記録作業が始まった。回復された分離の観点に立てば、突然の融合の動きから発生した事件は、危険なもの、洗聖なものにみえる可能性がある。またそれが文字による記録という大変危険、かつ重要な作業になれば、権力から

強い影響を受けることになる。<sup>(3)</sup>

清の立場からすれば、分離には朝鮮という国家との関係における分離の部分と、清内部における仏教と儒教という二つの文明の分離の部分があった。まず、清における前者の記録の問題への対処を朝鮮使臣とパンチエン・ラマとの出会いに関する礼部の以下のような記録から見ることが出来る。

今月の十二日に、臣等が勅旨に遵って会同理藩院司員等を派遣し、朝鮮使臣の正使朴、副使鄭、書状官趙などを連れてきました。まず、札什倫布に行き、パンチエン・ラマ（原文は額爾德尼・筆者注）を拜見しました。礼を行った後は、座ってお茶を飲むように命令され、その国までの距離や、朝貢にきた理由についてのご質問がありました。当該使臣は、皇帝の七旬という大きな慶事があるので、祝賀を表す国書を差し上げるとともに、天恩に謹んで感謝するためであると答えました。パンチエン・ラマはこれを聞いて大いに喜ばれ、その場で、永遠に恭順すれば自然に幸福を得るといってお話と共に、使臣に銅仏と毛織の絨毯やチベットのお香や毛氈などを与えました。当該の使臣等は叩頭しながら感謝しました。<sup>(4)</sup>

この文書には、いくつかの虚偽の事実が含まれている。朴趾源は、「筆帖式（清の時代に各官庁で満州語の文書を作る書記の職名…筆者注）が持っている文書の中には、この意味が原本とは大いに異なるものがあつた」と指摘した。<sup>(5)</sup>たとえば、自らが『熱河日記』に書いた事実と礼部の奏を比較して、「パンチエン・ラマにお辞儀をして会ったとか、使臣たちに物を与えた件で、当該の使臣等が叩頭で感謝した云々は、すべて妄言である」と非難した。<sup>(6)</sup>当然の批判である。そして、この差が発生した過程としては、礼部が奏を転送する際に改ざんを行ったからであると、礼部の独断的な行動を取り上げたのである。

この問題に対する使臣の反応は、以下のようなものであつた。



使臣はこの事態に大いに驚き、担当の通訳を礼部の朝房に向かわせ、その理由について問い詰めさせた。

「なぜ勝手に文書を改ざんし、また知らせもしなかったのか」というと、郎中が大いに怒り、「あなた達の文書がまったく事実ではなかったから、礼部の官僚があなた達の国のために周旋してすでに報告をしたのに、あなた達は徳になることを理解せず、逆に怒って問い詰めるのはどういふことだ」といった<sup>(3)</sup>。

使臣の素早い反応は、限られた通信の機会しかなく、また外交官の間で外交活動自体が限られていた当時の字小事大の国際関係において、文書が持っている圧倒的な重要性からすれば当然なものであった。しかも、この文書には、自分が行っていない危険な行動があなたも行われているかのように書かれていたのである。この使臣の問題提起は、朝鮮と清の記憶をめぐる闘争の始まりであった。

清の立場は虚偽に立っているため、身を持って経験している相手との論争に勝ち目はなかった。朴趾源が、礼部の議論について何をいつているのかわからないくらい支離滅裂なものになったと記しているのは、おそらく真実であろう<sup>(4)</sup>。しかし、使臣が持つ真理をめぐる優位性は、論争における勝利をもたらさなかった。礼部は、使臣からの抗議文の受け取りを拒否したり、また熱河からの出発時間を早く皇帝に報告するように命じて、使節団に早急に北京へ出発するように催促したりした。使臣は八月十五日の北京への上陸の直前までこの問題を訴えたが、結局結論を得られないまま、熱河を離れるしかなかった。

多数の人が参加した行事をめぐる清と朝鮮の当事者の記憶が異なるわけがなかった。ただ、礼部の文書は清の内部へ向けて書かれたものであるため、そこには残すべき正しい像があったのである。朴趾源はこのような意図した誤りをもたらす政治的環境について、「しかし、奏のおかれた状況からすれば、仕方のない（原文は不得不、筆者）ことであろう」という理解を示している<sup>(5)</sup>。清は、この「仕方のない」ことをするために、朝鮮の問題提起

を権力で抑え込み、使臣を物理的に分離する方策を取ったのである。その結果、朝鮮との関係が問題にならない分離の状況で、望ましい記憶を維持することができた。

ところで、この事件をめぐる記憶の空間が熱河から北京に移るとともに、清内部における仏教と儒教という二つの文明の分離が現れた。清王朝の基礎的な記録である『清実録』にも、朝鮮使臣の熱河訪問が紹介されている。そこには、乾隆帝が、朝鮮の恭順を賞讃し、朝鮮の貢物を免除した勅諭が長く引用されている。<sup>(41)</sup>一方、パンチェン・ラマと朝鮮の使臣との出会いに関しては、両者を含めた多数の人々が共に行事に参加していたことに触れているだけで、特別に言及しているところは一切ない。このような記録からすると、朝鮮使節の熱河訪問は、字小事との関係のさらなる確認のようには見えない。このような印象は、融合から分離という変化による隠ぺいではなく、皇帝を中心に歴史をまとめたために生じた自然な欠落として理解される可能性もあるかもしれない。

ところが、もう一人の当事者であるパンチェン・ラマのチベットからの記録は、分離の力の影響を物語っている。『清実録』のパンチェン・ラマ関連の記録を検討すると、たとえば、乾隆帝の誕生日の八月十三日の記録に、パンチェン・ラマに関する記述がないなど、彼の存在が重視されていないような印象を受ける。<sup>(42)</sup>石濱裕美子は『起居注』と『清実録』の記録だけを見ると、乾隆帝とパンチェン・ラマとの交流が非常に簡単なものであったように見受けられることを指摘し、チベット語で残されている記録との比較を通じて、乾隆帝とパンチェン・ラマの頻繁な交流を復元することで、この印象が誤っていることを実証した。<sup>(43)</sup>そして、この誤った印象を与える記録が生まれた理由について、『起居注』と『清実録』は、皇帝の行動の中でも儒教儀礼に則っていたもののみが記事として採録されており、逸脱した「異例」な会見や儀礼は無視されていたことを意味すると指摘した。<sup>(44)</sup>この指摘を本稿の流れから取りなすと、北京の乾隆帝の周辺では分離の仕組みが存続していたために、清の記録の中で

儒教の部分を代表するテキストにあつては、融合の時空間で現れた仏教という他者を排除・隠ぺいする力が作用したことになる。チベット仏教の圏域と儒教の圏域は、チベットに派遣された官僚に乾隆帝がパンチェン・ラマに叩頭することを勧めながらも、それを記録して報告する行為に関しては叱責していたことからわかるように、この時期においても分離の特徴を維持していた。そして、清における分離の再構成の過程でパンチェン・ラマの存在が薄くなるにつれ、朝鮮の使節とパンチェン・ラマとの邂逅、そしてそれをめぐる混乱も記憶されなくなることで、清と朝鮮の関係に関する記録には、字小事大の理想像だけが残ることになったのである。

## （二）朝鮮における分離への復帰

大国の清と比べ、小国の朝鮮における分離とは、国家の存亡に関わる、より嚴重で、かつ危険な問題であった。たとえば、朝鮮の使臣は清における活動に関する報告を本国の朝廷へ頻繁に送った。彼が朝鮮へ送る文書は、発信者も受信者も朝鮮の人々であるため、その内容には朝鮮の人々が共有する観点が明確に入ることになる。この文書は、朝鮮へ無事に届けられれば清の人々がその内容を目にするのではないという意味で、分離を前提にしていたのである。ただし、朴趾源は、文書が途中で紛失されることで清にその内容が伝わり、朝鮮に大きな打撃を与える可能性について憂慮していた。すなわち、予期せぬ分離の崩壊がもたらす破局の可能性は、常に存在していたのである。そこで彼は、文書の書き方について、中国に関する情報がある場合はその真偽を問わず、「本国へ送る状啓は、すべてハングルで作成し、状啓が朝廷に届いたあと、それを翻訳して上奏するのが妙策かと思う」と提案した。<sup>46</sup> これこそ、分離を安定的に維持しうるもつとも信頼できる方策だからであった。

幸い、朴趾源が参加した使節団が清に滞在している間に、正祖へ送った状啓は分離を維持したまま、無事ソウルに届いたのである。第三章で触れたとおり、一七八〇年九月一七日に届いたこの状啓には、パンチェン・ラマと対面した八月十一日の記録も載っていたが、そこにパンチェン・ラマとの出会いに関する記録はなかった。さらに驚くべき事実は、熱河訪問の全日程を取り扱っているこの状啓に、パンチェン・ラマは一切登場していないことである。そして、朝鮮王朝の正史である『朝鮮王朝実録』の同日の記録にも同じ内容が記載されている。朝鮮の政治と歴史に関するもつとも権威のある記録において、パンチェン・ラマの存在は隠されていたといえよう。

ところで、外交の記録においては、パンチェン・ラマが登場していた。『同文彙考』は、朝鮮王朝が朝鮮後期―収録された文書の中でもっとも早いのは一六三六年―の対中国と対日本の交渉文書を集成した事大交隣の資料集であるが、使節団の熱河訪問からわずか八年後になる一七八八年に、その初編六〇冊が正祖に進上された。その中には、使節の書状官であった趙鼎鎮が報告した使臣別單（国王に献上する奏に付け加えた文書・筆者注）が記載されている。そして、そこには確かにパンチェン・ラマが登場した。<sup>41</sup>ただし、彼のパンチェン・ラマに関する叙述は、パンチェン・ラマの熱河訪問、および彼と乾隆帝との関係に関する一般的な記述にとどまっていた。すなわち、朝鮮の立場からすれば、もつとも重要であるはずの使節とパンチェン・ラマとの邂逅を含めた関係は、一切触れられていなかった。

要するに、使節団の主要職の三人の記述に基づいた朝鮮王朝のもつとも重要な政府の記録において、パンチェン・ラマとの邂逅は完全に隠されたのである。その結果、パンチェン・ラマに対する礼の問題も議論する前提がなくなつたのである。分離が維持される限り、儒教を重んじる朝鮮の権威ある記録に異端の仏教指導者が入る余地はそもそもなかったのである。

以上のような隠ぺいは、清での経験を共有している使節団の意識的、あるいは無意識的な共謀によって成功する可能性もあった。ただし、証拠を残さない記憶とは異なる、形あるものの存在の問題が朝鮮政界に大きな騒ぎをもたらした。仏像という悩ましい贈り物があったのである。

すでに触れたとおり、『熱河日記』には、使臣がパンチェン・ラマからの贈り物を通訳官などに譲渡したと書かれているため、その通りに処理されれば、パンチェン・ラマの存在と共に、この悩ましい贈り物も隠ぺいされたと考えられる。ところが、上記の状啓の記録がある九月一七日の『朝鮮王朝実録』の記事には、「皇帝が金仏一軀を使臣の便で送ることで、長寿を祈る誠意を表した。王がこれを聞き、直ちに使臣に、それを妙香山の寺院に置くよう命令した」という内容も書かれている。<sup>(45)</sup> 使臣は、一軀の仏像を朝鮮に持つてくることになったため、これに対する対処を前もって国王に相談したのである。

ところで、使臣が正祖に報告した一軀の仏像が、『熱河日記』で書かれている三軀の仏像の一軀か、それとも国王へもう一軀の仏像が贈られたかは、実は定かではない。<sup>(46)</sup> しかし、いずれにせよ、実際に使臣によって一軀の仏像がもたらされたことは事実である。この事実を前提に、本稿の観点からして重要なのはこの仏像によって、融合の空間で起きた政治的な行為が分離の空間である朝鮮に取り込まれるべき政治的な課題となったという点である。その結果浮上してきた緊急の政治的な課題は、使臣が仏像を受け取り、それを国内に搬入し、国王の命令でこれを安置したという事実を、儒学が支配する朝鮮において如何なる論理で正当化するのかというものであった。以下で、この正当化をめぐる政治的激動を考察してみよう。

仏像をめぐる議論は、使臣団の帰国の際にも出てきた。朝鮮国王の日記にあたる『日省録』の十月二十七日には、使臣の復命の際に行われた正祖と正使朴明源、副使鄭元始との以下のようなやりとりが記録されている。引

用文の「私」は正祖である。

私曰く「皇帝が送った金仏は如何に処理したのか」

朴明源等曰く「彼の国では、人の長寿を祈るためには、必ず金仏を与えます。故に、今回、金仏を送ったのも、また殿下のために祝寿することに本来の意味があります。臣がすでに途中で、寧邊の妙香山に置けという命を奉じました。したがって、一人の通訳に妙香山の清潔な寺院に置かせました。」<sup>60)</sup>

このやりとりが示す仏像をめぐる説明は、先ほどの『朝鮮王朝実録』の内容とはもちろん整合的であるが、朴趾源の記録とは少なくとも二点において相反する。第一に、仏像を送ったのは誰かという点においてであった。上記の通り『熱河日記』で、仏像を直接配ったのは、数十人のチベット僧侶であった。彼らがパンチェン・ラマの代理であったことは、いうまでもない。また、清の礼部も、それをパンチェン・ラマからの贈り物として書いている。ところが、正祖はそれを皇帝の贈り物と考え、また朴明源等はそれを前提にその意味を説明している。第二に、仏像にこめられた意味も異なっていた。朴趾源は銅仏を護身仏と理解し、「今回のこの銅仏は、パンチェン・ラマ（法王）からわが使臣に、旅程の無事を祈って贈られたものであるとみなされる」と書いている。<sup>61)</sup>ところが、朴明源等は、乾隆帝が正祖へ送る長寿の願いとして報告したのである。以上の内容から、朴明源等の報告では、朴趾源の記録とは異なり、仏像について、皇帝が国王への字々愛の意味を込めて贈ったもの、すなわち字小事大の關係の表れとして描かれていることがわかる。

そして、報告を受けた正祖は、仏像をソウルまで持つてくるのではなく、帰路の途中にある寺院に納めるように処理したのである。皇帝の好意を無視することはできないが、仏教を異端とみなし、僧侶のソウルへの自由な出入りすら禁止していた朝鮮からすれば、寺院への保管によるソウルへの搬入禁止は、よりバランスの取れた当

然の措置であった。

使臣と正祖の間では、皇帝を前面に出すことで、字小事大の原理から仏像の問題がかりうじて処理されたように見える。ところが、直ちにこの処理に対する問題提起がなされた。仏像をめぐる論争は、朝鮮王朝の国立大学に当たる成均館の儒生が、使臣が清から仏像を受けてきたことに対して厳しく批判したことから始まった。成均館の儒生は、国家の重要な事案がある場合に、同盟休校の一種である捲堂という制度を利用して、自分たちの意思を公に表すことができた。捲堂が発生すると、儒生の意思は成均館の担当官である大司成等を経由して、国王に伝わることになっていた。銅仏の件で、成均館の儒生は食事を拒否しながら捲堂を始め、十一月八日に彼らの主張が正祖に伝わったのである。

今回の使臣が帰還する時に、金仏を受けてきたことがありました。わが国は、本来儒教を崇拝し、道を重視することで、中華から尊敬され、重視されてきました。ところが、今回の使臣の往来では、邪悪なものを持ってきました。これは我が国家に恥をかかせただけでなく、また天下の後世の人々に笑われることになり、ます。臣等は聖人を推尊するところにいながら、仏を奉ずることを目撃して心が切に驚いたので、道理として沈黙することは難しかったです。<sup>54)</sup>

朝鮮王朝の将来を担う若きエリートの議論は、まさに朱子学の原理の純粹な発現であった。成均館の儒生からすれば、融合の空間では賢明に見えた使臣の政治的行為は、政治的批判の格好の材料になったのである。

この厳しい批判に対して、使臣は何らかの反応をみせなければならなかった。『承政院日記』十一月十二日の記事に、正使の朴明源の上疏が記載されている。朴明源は「臣の知識が足りないといえども、異端は必ず排斥すべきであることは知っています。どうして邪悪なる夷狄のもとを受けることがあったのでしょうか」といって、<sup>55)</sup>

自己の儒学への信念を強調した。そして、仏像を受けたことについては、「それが皇帝の命令から出たので、どうしてその旨に逆らうことができるのでしょうか。礼部の書いた仏像などが入った奏の文書を見て、初めてそれが皇帝の意思から出たことがわかりました」と弁明している。同じ日に副使鄭元始も、正祖に文書を献上した。鄭は、「金仏を頂く際に、受け取れないという義で何度も辞退しました。ところが、彼らは皇帝の意思であるとして、咨文（同様な関係の機関の間で往来する公文書・筆者注）を送ると言いました。臣たちは議論したのですが、このめめごとが拡大されればさらに困難なことになるので、むしろ我々自らがこれを処理する方がいいとしました」と述べている。<sup>(5)</sup> 両者の議論で共通しているのは、仏像を受け取ったことは皇帝の命令によるものであったため仕方がなかったということである。仏像の受入も、受け入れた後の処理も、それが乾隆帝の意思であるため仕方がなかったという弁明である。一方、朴明源の説明では、それが皇帝の意志であるために従ったということとどまっているが、鄭元始によればそれでも拒否しようとしたが、国際政治的な判断でそれを断念したということが明白である。すなわち、正祖への説明の際に強調された字小事大の原理からの正当化とともに、現実政治の力の原理から自分たちの信念とは異なった行動をとったことへの理解を求めたのである。

このような説明は、国王のために一躯の仏像を別に受け取った場合にはもちろん、国王への仏像が三躯の仏像のうち一躯の場合でも無理な説明ではなからう。実際、銅仏が渡された場には皇帝も同席しており、その贈り物は皇帝の意思による邂逅の一部である点からも、このように解釈することは必ずしも不可能ではなかった。しかも、字小事大の国際関係においては、皇帝の書いた文書を伝える使節は、皇帝と同じ待遇をされるべき立場でもあって、使節の待遇が繰り返し返し外交をめぐる礼讓の問題になるなど、皇帝とかかわりを持つ人物やもの—この場合は皇帝の先生といわれていたパンチェン・ラマと仏像—は、皇帝と一体化されていたことも考慮すべきである。



う。<sup>(5)</sup> 彼らの主張の通り、それが清とのやりとりの中で確認できれば、彼らの説明はひとまず理屈に合う。<sup>(5)</sup>

ところが、いくら皇帝が送ったものとはいえ、仏像ということになると、分離された空間において完全な正当化は難しかったようである。言い換えれば、成均館の儒生からすれば、使臣の二つの正当化の論理は受け入れがたいものであった。第一に、乾隆帝が仏像を渡したとすれば、それは皇帝が異端を勧める行為であるため、乾隆帝を正当な皇帝として認めないか、あるいは、皇帝の間違った行為について抗議すべきである。実際には、熱河でパンチエン・ラマとの邂逅を勧められた際に、裨將の反応が前者であって、使臣団の議論の中では後者があげられていたのではなかったのか。すなわち、この議論は分離を前提にした儒教の原理からすれば、使臣団も認めざるをえない部分があった。第二に、国際政治の現実については、正しいことをするために、は如何なる犠牲も受け入れるという態度が儒学者の理想像であることから、この状況論もやはり受け入れがたい。これこそ、清がいくら強大であろうとも、中華として認めない小中華意識の基礎であったのではないか。その結果、パンチエン・ラマの存在を隠へいしたうえで融合も、朝鮮という分離の空間では認められない。実は、このような正当化の限界は、使臣もすでに理解していたようである。鄭元始は上記の文章の中で、以下のような結論を出している。

当時の状況では、仕方のない部分がありました。が、原則（『経』）を守るべきであったという議論について、臣は真摯に受け止め、自らを咎めます。<sup>(5)</sup>

鄭元始の結論に見える弁明と自責の並存は、まさに融合の空間の行動が分離の空間の基準によって評価される現実への諦めであり、また受入であった。

そして、双方からの議論に対する結論は、正祖によって出された。正祖は、使臣の出発の際に、状況にあった

判断を使臣に託していた。<sup>(5)</sup> また、仏像の搬入を了解したうえで、その処理を指示した張本人でもあった。正祖は、儒教的な国家の代表でありながら、一方では、王朝の国際政治の責任者でもあった。彼の結論は、「引責をして何の利益があるのか」と返答をすることで、彼等を許すことであつた。<sup>(6)</sup> どちらが正しいのか判断せずに、実質的に処罰を免除するこの判断は、政治的な犠牲をささずに融合から分離への変換をスムーズに行うという意味で見事なものと呼ぶべきよう。

ただし、罪が免除されたとはいえ、使臣たちには事件の傷が長く残つたようである。朴明源は、三年後の一七八三年にも正使として清にいくように命令を受けたが、彼は以前の儒生の峻厳な議論を考えると今でもなお身の置きどころがないという理由をあげながら辞退を申し出て、正祖はこの辞退を受け入れたのである。<sup>(6)</sup>

以上の考察から、朝鮮における融合から分離を回復する過程が理解できよう。最後に、朴趾源と『熱河日記』の運命について触れておこう。もし朝鮮の為政者の意図の通り、パンチェン・ラマとの邂逅に関する記録の隱ぺいが完全に成功していたとすれば、おそらく本稿の記述は不可能であつただろう。すなわち、朝鮮側の公式的な記録だけでは、熱河で朝鮮の使節団に起こつた事実のほとんどは文字としては残らず、永遠に忘れ去られていたかもしれない。ともすれば、分離を妨げる重要な事件が実際に歴史から数多く消されているのかもしれない。この歴史を伝えた朴趾源の精神は、この構造的束縛を克服していたといえよう。ところが、朴趾源も、そして『熱河日記』も、結局のところ、分離の磁場から完全な自由を獲得することはできなかった。『熱河日記』などで彼が文名を馳せるようになる、彼が拒否した権力は、彼が書いた内容と文体を問題視し始めた。その中でも、朴趾源が『熱河日記』<sup>(6)</sup>で清の年号を用いていたことが、「夷狄の年号の文章（『虜号之稿』）」であるという理由で大きな問題となつた。清と朝鮮の間の外交文書にはもちろん清の年号が用いられていたが、それが国内の著作で用

いられたことで、攻撃の対象になったのである。朴趾源は、圏域の分離の原理が持つ問題性を探るための材料を残したが、その分離の原理によって復讐されたといえよう。その影響は、『熱河日記』にも及んだ。このテキストをめぐる版本の問題は、まさに朴趾源がこの力に翻弄され、『熱河日記』の校閲の作業などが完成されなかったことの結果である<sup>(8)</sup>。圏域の分離の力が、それと闘った自由な知識人と彼のテキストにも爪痕を残したことは、この歴史的な構造が持つ強さの一つの証明であろう。

## 五．おわりに

本研究は、朝鮮使節とパンチェン・ラマの邂逅という突発的な事件に対する考察を通じて、安定している際には見えづらかった清と朝鮮との間に存在した分離の仕組みを考察した。清の天下のもとで並存していた儒教と仏教という二つの国際政治の圏域の融合の登場と分離の修復の過程をたどることで、清と朝鮮の間に存在していた安定のための仕組みである圏域の分離の構造が見えてきた。分離に対する考察を通じて、多面的な文明を持つ清が朝鮮に対しては儒教文明だけを用い、一方、朝鮮は国内では小中華の意識を主流にしながらも、清に対しては純粹な朝貢国のように振る舞うことで、各々の政治的アイデンティティの変動が両国の関係に影響を及ぼさないようにする構造の存在を明らかにした。そして、分離の仕組みには、融合などの危機が発生した場合は、現れた両国関係の問題を国内向けに再解釈することで、不安定を管理し、圏域の分離を修復する能力も備わっていたことも理解できた。

一七八〇年の事件の後にも、清と朝鮮の関係は以前の通り続いた。朝貢使節は相変わらず北京を訪れ、両国は字小事大の原理を確認し続けたのである。このような分離の仕組みが本当の危機に直面したのは、西洋の勢力が東アジアにも本格的に影響を發揮し始めた一九世紀後半であった。西洋近代の国際関係の受人の際に、清は字小事大の原理を用いて、清と朝鮮の関係を近代的な不平等関係にすることを試みた<sup>(6)</sup>。圏域の融合を一つの圏域の拡大として正当化する外交策は、乾隆帝と李鴻章が共有していたのである。おそらくこの類似性は、偶然的なものではなく、清の外交の分離と融合という構造的な特徴から培われた感覚の連続として理解できよう。

最後に、本稿の考察から、清と朝鮮との関係について、以下のような新しい理解の可能性が見えてくることを指摘しておきたい。第一に、前近代の両国関係に関しては、両国の間の約二〇〇年の平和は、相手に対する本当の理解の諦めや自国認識の内的分裂という基礎の上に築かれていたため、この平和は、相手に対する本当の理解や自国認識の統合によって、逆に不安定に陥いる可能性を秘めていたことも理解できよう。第二に、西洋近代国際秩序とその原理としての国際法の受入に関しては、それが一元的な秩序と原理を両国関係にもたらすことで、国際関係の領域において分離の仕組みが作用する前提を除去したという意義も持つことも理解できよう。ところで、この二つの現象は、今日においても不調和のままなのではなからうか。分離の中で温存され、さらに強化された自己像が現在の両国の政治的アイデンティティの一部を構成しているとすれば、分離が不可能な今日の状況にあつて異なる相互への認識の衝突が両国関係において葛藤をもたらすのは自然な現象であろう。たとえば、東北工程をめぐる中国と韓国の激しい対立は、この側面から説明されるべき部分をすこぶる含んでいると思われる。中国と韓国は、相手に対する真摯な理解を避け、また自国に対する省察も十分ではないまま分離によって手に入れた長い平和の対価を、今日でも払い続けているのかもしれない。

【注】

- (1) 清の中国化 (sinicization) という定説に対する先駆的な問題提起としては、Evelyn S. Rawski, "Presidential Address-The significance of the Qing Period in Chinese History," *The Journal of Asian Studies*, 55-4 (1996), pp. 831-834を参照。清における満州族の民族性 (ethnicity) の重要性に対する実証的研究としては、Mark C. Elliott, *The Manchu Way: The Eight Banners and Ethnic Identity in Late Imperial China* (Stanford University Press, 2001)を参照。また、清における多民族統治の構造と認識の歴史については、平野聡「清帝国とチベット問題：多民族統合の成立と瓦解」(名古屋大学出版会、二〇〇四年)を参照。
- (2) 中央アジアを対象とする清の征服 (Qing conquest) の過程や意味については、Peter C. Perdue, *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia* (Harvard University Press, 2005)を参照。また、清が植民主義的な政策のために、地理や民族に対する表象を如何に利用したのかについては、Laura Hostetler, *Qing Colonial Enterprise: Ethnography and Cartography in Early Modern China* (The University of Chicago Press, 2001)を参照。また、清の拡大を帝国主義・植民主義の観点から捉えなおすアメリカ学界に対する中国学界からの反応については、劉風雲、劉文鵬編「清朝的国家認同：「新清史」研究与争鳴」(中国人民大学出版社、二〇一〇年)の中国人論者の議論を参照。
- (3) 「朝鮮中華主義」に関する先駆的研究としては、鄭玉子『朝鮮後期 歴史의 理解』(一志社、一九九三年)・鄭玉子『朝鮮後期 朝鮮中華思想研究』(一志社、一九九八年)を参照。歴史認識の変化を中心に小中華意識の深化の様子を描いた成果としては、許太裕『朝鮮後期 中華論과 歴史認識』(아카넷、二〇〇九年)を参照。また、朝鮮における小中華の信念と国際政治の現実との齟齬にも注目した研究としては、孫衛国『大明旗号与小中華意識：朝鮮王朝尊周思明問題研究』(一六三七—一八〇〇) (商務印書館、二〇〇七年)を参照。
- (4) 夫馬進「明清中国の対朝鮮外交における「礼」と「問罪」」夫馬進編『中国東アジア外交交流史の研究』(京都大学学術出版会、

二〇〇七年) 311—315頁。

論 (5) 同書、三四六頁。

(6) M. Mancall, "The Ch'ing Tribute System: An Interpretive Essay" in J. K. Fairbank eds., *The Chinese world order: Traditional China's Foreign Relations* (Harvard University Press, 1968), pp. 72-75.

(7) 岡洋樹「東北アジア地域史と清朝の帝国統治」『歴史評論』第六四二号、二〇〇三年十月、五十二—五十三頁を参照。また、清帝国の領域の区別に関する研究史については、平野聡、前掲書、二十三—六十九頁を参照。

(8) チベットに関しては、石濱裕美子『チベット仏教世界の歴史的研究』(東方書店、二〇〇一年)、また、新疆に関しては、片岡一忠『清朝新疆統治研究』(雄山閣出版、一九九一年)や片岡一忠「朝賀規定からみた清朝と外藩・朝貢国の関係」『駒沢史学』第五十二号、一九九八年六月、二四〇—二六三頁などを参照。

(9) パンチェン・ラマ六世については、嘉木央久麦旺波著、許得存、卓永強訳『六世班禅洛桑巴丹益希伝』(西藏人民出版社、一九九〇年)を参照。

(10) 『熱河日記』に関するもっとも包括的な研究としては、金明昊『熱河日記研究』(創作社、批評社、一九九〇年)を参照。また、『熱河日記』を史料として用いた歴史研究の先駆的な成果としては、関斗基『熱河日記』에 비친 清朝의 漢人統治策』、『中国近代史研究』紳士層의 思想과 行動』(一潮閣、一九七三年)、五十四—八十四頁を参照。

(11) 『熱河日記』に見える朴趾源の国際政治論に対する国際関係学からの分析としては、河英善「燕岩朴趾源의 中国마로보기」、『歴史의 鏡에 그들』(乙酉文化社、二〇一一年) 七十一—五十一頁を参照。

(12) この訪問の重要性は、十九世紀後半に、王之春が清の外国との関係をまとめるにおいて、一七八〇年の内容としてパンチェン・ラマ六世の訪問だけをあげていることから、明確に確認できる。王之春『清朝柔遠記』(中華書局、一九八九年)、一三〇—一三一

頁を参照。

- (13) 使節団の北京から熱河までの旅程については、『熱河日記』の「漠北行程録」（朴趾源『燕岩集』十二卷、五十六―七十一頁）を参照。
- (14) 朴趾源『燕岩集』十二卷、七十八頁。
- (15) 本研究では、国際政治の圏域を「国家間において、共同の観念体系と政治意識が共有されることで、一定の行為の型態と名分が維持され、また、正当化される空間」と定義して使用する。この定義は、李用熙の研究に基づいている。国際政治の圏域の詳細は、李用熙『一般国際政治学・上』（博英社、一九六二年）、四十六―八十二頁を参照。
- (16) 朴趾源、前掲書、十二卷、七十八頁。
- (17) 同上。
- (18) 平野聡『大清帝国と中華の混迷』（講談社、二〇〇七年）、一七二―一七三頁。
- (19) 擁正帝と乾隆帝の「中外一体」概念については、平野聡『清帝国とチベット問題…多民族統合の成立と瓦解』、八十五―一四六頁を参照。
- (20) 朴趾源、前掲書、十二卷、七十八頁。
- (21) 同書、十二卷、七十九頁。
- (22) 同書、十三卷、三十七―三十八頁。
- (23) 同書、十三卷、三十八頁。
- (24) パンチェン・ラマと清朝旗人官僚をめぐる礼の問題に関しては、村上信明「パンチェンラマ三世の熱河来訪と清朝旗人官僚の対応…十八世紀後半の清朝チベット関係の側面」『中国…社会と文化』第二十一号、二〇〇六年六月、一二五―一四一頁を参照。
- (25) 『承政院日記』一七八〇年九月一七日。

- (26) 朴趾源、前掲書、十三卷、三十七頁。
- (27) 同書、十三卷、三十八頁。
- (28) 同上。
- (29) 同上。
- (30) 同上。
- (31) 同書、十三卷、四十二頁。
- (32) 同上。
- (33) 清における権力と文字・記録との関係については、閔斗基「清朝의 皇帝統治와 思想統制의 實際: 曾靜謀逆事件과 『大義覺迷録』을 中心으로」、前掲書、(一潮閣、一九七三年)、二一五—三頁・石橋崇雄『大清帝国』(講談社、二〇〇〇年)、一九六—二二三頁・Jonathan Spencer, *Treason by the Book* (The Penguin Press, 2001) などを参照。
- (34) 朴趾源、前掲書、十三卷、四十二頁。朴趾源は、この文書の紹介で、使臣とパンチェンラマの出会いを八月十二日にしているが、これは十一日の誤記と思われる。すでに触れたとおり、朴趾源自らが「太学館留記」では十一日と書いている。「太学館留記」は自ら書いた日ごとの記録に基づいているので、信憑性が高い。ところが、礼部の文書は転写する作業を経て『熱河日記』に載ることになったことを考慮すれば、この錯誤の原因は、朴趾源の原本からの転写、あるいは、転写したものを『熱河日記』に転写する際の過失にあると推測される。『熱河日記』の著述過程については、金明昊、前掲書、十八—二十七頁を参照。また、中国やチベットの記録においても、十一日の方が正しいことが確認できる。この点については、石濱由美子「パンチェンラマと乾隆帝の会見の背景にある仏教思想について」『内陸アジア言語の研究』第九号、一九九四年七月、三十一—三十五頁を参照。
- (35) 朴趾源、前掲書、十三卷、四十二頁。



- (36) 同上。
- (37) 同書、十三卷、四十四頁。
- (38) 同書、十三卷、一頁。
- (39) 同上。
- (40) 同書、十三卷、四十二頁。
- (41) 『清実録(第二十二冊)』(中華書局出版、一九八六年)、八七二頁。
- (42) 同書、八七二―八七三頁。
- (43) 石濱由美子、前掲論文、三十一―四十頁。
- (44) 同論文、四十頁。
- (45) 村上信明「駐藏大臣の「瞻礼」問題にみる十八世紀後半の清朝・チベット関係」『アジア・アフリカ言語文化研究』第八十一号、二〇一一年三月、五十一―五十五頁。また、チベットと清における礼と権力をめぐる葛藤の歴史については、James L. Hevia, "Qing Emperors, Lamas and Audience Rituals" in Joelle Rollo-Koster eds., *Medieval and Early Modern Ritual: Formalized Behavior in Europe, China and Japan* (Brill, 2002), pp. 279-302を参照。
- (46) 朴趾源、前掲書、十四卷、七十二頁。
- (47) 国史編纂委員会編『同文彙考・二』(国史編纂委員会、一九七八年)、一六八九頁。
- (48) 『朝鮮王朝実録』正祖四年九月一七日。
- (49) 金東錫は、使臣等がパンチェン・ラマから受け取った仏像と使臣が国王に献上しようとした仏像が同じものであると考え、仏像をめぐる政治的動きを分析した(金東錫『隨槎録』과 其他 資料를 通해 읽어보십시오 『熱河日記』、『大東漢文学』第二十三輯、

二〇〇五年十二月、一九五―二〇五頁）。この論文で、仏像は別物であった可能性については言及されていないが、実はその可能性も存在した。

まずいくつかの点で、仏像が同じものであることは疑わしい。第一に、仏像の名称が基本的に異なる。パンチェン・ラマからもらった仏像をその材料を表しながら呼ぶ場合は、残されている記録で一回の例外―小金像―の以外は、銅仏と書かれているが、国王に送られた仏像は、すべて金仏になっている。前者と後者の材料が異なった可能性がある。第二に、数の相違も問題になる。パンチェン・ラマが使臣にあげた仏像は三軀であるが、国王に送られた仏像は一軀である。使臣に送った三軀の中で、一軀を国王に送ることは礼儀上、不適切であることはもちろん、礼部ですでに使臣に送ったことで文書まで作成したのに、それを変えることは手続きとしても不自然である。

以上のような疑問から出発して、別に国王への一軀の金仏を送った可能性は以下の二点で確認できる。第一に、パンチェン・ラマは金仏を持っていた。パンチェン・ラマが乾隆帝に贈呈した貢品の中には、響銅仏像とともに何種類の鍍金仏像が入っていた（秦風京「六世班禪朝覲与清廷回賜文物存考」『歴史檔案』二〇〇八年三期、六十八―七十一頁）。したがって、パンチェン・ラマが、皇帝以外の使節や国王などへの贈り物として銅仏を持ってきたとすれば、金仏も持ってきた可能性が高い。第二に、朝鮮の使臣は、十一日以外にもパンチェン・ラマと会った。金東錫は、『朝鮮王朝実録』と『承政院日記』に載っている例の状啓の八月十四日に使臣が後園にいった記録があるが、『熱河日記』には八月十一日に乾隆帝とパンチェン・ラマがいる後園に行ったことになっていることから、状啓がパンチェン・ラマを隠すとともに時間も変えたと断定している（金東錫、前掲論文、一九七頁）。ただし、後園に行ったことを隠すのはともかく、行かなかった日に行ったという嘘をつく合理的な理由はない。しかも、十四日は実際、乾隆帝とパンチェン・ラマが後園にいったことがチベットの記録から確認できる（石濱由美子、前掲論文、三十六頁）。十四日に使臣と乾隆帝とパンチェン・ラマは一緒にいたと想定することが自然であろう。また、朴趾源が使臣と行動を別にした十二日に使臣は

乾隆帝とパンチエン・ラマと一緒であった（『清実録（第二十二冊）』、八七二頁）。乾隆帝の誕生日の十三日の行事で一緒であったことはいうまでもない。すなわち、使臣がパンチエン・ラマから国王宛の金仏をもらう機会も十分であったのである。以上のような考察から、本稿では、銅仏と金仏が別物であった可能性も考慮しながら、記述していく。

(50) 『日省録』正祖四年十月二十七日。

(51) 朴趾源、前掲書、十三卷、四十二頁。

(52) 『朝鮮王朝実録』正祖四年十一月八日。

(53) 『承政院日記』正祖四年十一月十二日。

(54) 『朝鮮王朝実録』正祖四年十一月十二日。

(55) 朝鮮と中国との外交関係における文書の重要性については、金暻緑「朝鮮時代 対中国外交文書の 接收・保存体系」『韓国史研究』第一三六号、二〇〇七年三月、一六三—一七〇頁を参照。

(56) 使臣の受取拒否の努力などに関する説明は他の記録によって裏付けられる。『隨槎録』は、同じ使節団に裨將として参加した盧以漸が遺した使節の記録である。『隨槎録』には、パンチエン・ラマとの出会いが以下のように描写されている。

乾隆帝が我が使臣にパンチエン・ラマへ赴いて会うようにさせた。辞退しても仕方なかったので、赴いて会った。パンチエン・ラマはどうして来たのかを聞いたので、使臣が理由について答えた。パンチエン・ラマは笑って、永遠に恭順すれば自然に幸福をえるといった。乾隆帝の命令で使臣に毛織の絨毯やチベットのお香や毛氈などのものを賜わって、また、各々童仏を一個与えたが、使臣は辞んで受けなかった。礼部が繰り返し返し恐喝を加え、事態が母国に災いが生じることになりそうだったので、それを受け入れるしかなかった（権延雄「盧以漸의『隨槎録』解題」原文 標点『慶北史学』第二十二輯、一九九九年八月、五十六—五十七頁）。

盧以漸は仏像を送った主体を皇帝とみなした。彼の記録は、パンチェン・ラマとの出会いを記録している点において、出会いを隠したためパンチェン・ラマに代わる存在として乾隆帝を前面に出した使節団のものとは違っていた。盧以漸のこの記録は、作者の名前も記されずに、未完成に終わって、刊行されなかった原稿であったことから、より正直な記述ができたと思われる。使臣の受諾の理由に関するこの記録の説明が、銅仏を皇帝からのものと見なしていた点において、本文の引用資料としている文献と一致しているので、使臣等の説明は信頼性があると思われる。盧以漸の人物像については、金東錫「盧以漸의 『隨槎録』에

關한 研究」『韓國漢文學研究』第二十七輯、二〇〇一年六月、二六二—二六四頁を参照。

(57) 『朝鮮王朝実録』正祖四年十一月十二日。

(58) 同書、正祖四年五月二十五日。

(59) 『承政院日記』十一月十二日。

(60) 『朝鮮王朝実録』正祖四年七月二日。

(61) 『熱河日記』の編集過程とその内容に対する朝鮮の知識界の反応については、金明昊、前掲書、二十一—二十二頁を参照。

(62) 朴趾源による『熱河日記』の公刊の挫折とこれによって生じたテキストの混乱については、同書、二十三—二十七頁を参照。

(63) 「親中国」という言葉で表現されたこのような外交策の展開については、拙稿「中国的世界秩序の変容と言説・『朝鮮策略』の「親中国」をめぐる議論を中心に」『思想』、第九四四号、二〇〇二年十二月、九二—一〇九頁を参照。